

特定非営利活動法人シマフクロウ・エイド 設立趣旨書

趣旨

シマフクロウは、かつてアイヌ民族からコタンコルカムイ(村の守り神)と呼ばれ全道に生息していたと云われています。

現在は、様々な開発のあおりを受けて生息環境が悪化し、レッドデータブックでも絶滅危惧種に指定されており、北海道の一部に130羽程度しか生息していない希少な鳥です。

シマフクロウは、1993年より環境省の監督下で保護増殖事業が始まり、僅かずつではありますが個体数は増えてきているものの、生息環境の保全は追いついておらず、いまだ絶滅の危機を脱していません。

また、観察のルールは整っておらず、多くの人に保護の成果を知らしめたくとも出来ないのが現状です。そのため社会的認知度が低く、支援や援助も受けにくい状態です。しかも、国(環境省)の財政には限りがあり、シマフクロウだけに予算を多く使うことができません。そのため全体的に幅広い活動が出来ず、バランスのとれた調査・研究が行えない状況にあります。

一方で調査・研究に携わる者の高齢化は深刻で、新しい人材の確保・育成が急務であるにも関わらず、公に門戸が閉ざされているのが実情です。

そこで私たちは、シマフクロウ保護に携わる人達がより円滑に活動できるよう支援し、生息環境の保全を進め、多くの人にシマフクロウとその置かれている実情を知ってもらい、生息地である地域の意識向上を進め、次世代に継承していく新たな人材の育成につなげることを目指し、実践していきます。

かつてのように、シマフクロウが北海道中に生息していた状態に近づけていくことを趣旨として「シマフクロウ・エイド」を設立します。

2 申請に至るまでの経過

1992年より、シマフクロウを1羽でも増やしたいという思いから任意団体の「シマフクロウを増やす会」を発足させ、生息確認調査を主体に活動を行ってきました。

現在僅かずつ個体数は増えて来ているものの、生息環境の保全は追いついておらず、せっかく増えた新たな個体の安住の地を確保することが難しい状況です。

そのためひとつの地域、ひとつの自治体だけの折衝ではない広域な活動が必要となりました。さらに、多くの人や企業、地方自治体、関係省庁から協力を得るためには公益性を範とするNPO法人という立場を明示しないと、実現が立ち行かないことを体験し、社会的信頼の確保が不可欠と感じるようになりました。

そこで私たちは、シマフクロウの保護・保全活動をより活性化させていくために、それらをサポートする機関が必要だと考えました。不足している資金や人材を補い、現状を理解してもらい橋渡し役となり、市民や行政、企業との協力のもと一つの循環(仕組み)を作ります。

貴重な地域資源としてのシマフクロウの保護・保全、啓蒙、育成、普及活動は、公共の利益に基づくものと考え私達は法人化の申請に至りました。